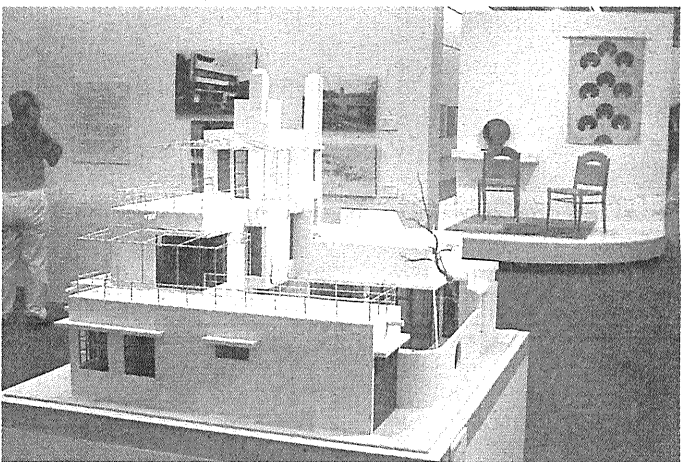


レーモンド展の会場。手前は「コンク  
リート住宅」「臺南坂の自邸」の模型



回展として実現したが、神奈川県立近代美術館・鎌倉で開かれている「建築と暮らしの手作りモダン アントニン&ノエミ・レーモンド」展だ。

目新しい視点は、妻ノエミに注目したことだ。デザイナーだった彼女の存在で、建築から内装、家具、調度まで総合的なデザインが生み出された。また最先端の打ち放しコンクリート建築も、日本の伝統から学んだ木造建築も、職人の手仕事に支えられていたのを知った。本展に合わせて出版も相次いでおり、国内外でレーモンドへの関心が高まるだろう。

ところで建築展に行くといつてもどこかしく思うことがある。図面と模型、写真だけが本物は体験できない。それどころか、すでに姿を消した建築も多い。16日に開かれたシンポジウムでも「リーダーズ・ダイジェスト東京支社」「葉山の別邸」などの名作を、元所員らが目の前にあるように語ってくれたが、私たちは資料でしか知るすべはない。

その席で東京女子大学の旧東寮の解体も報告された。キャンパス整備計画に伴うもので、作家の永井路子氏らOGを中心に反対運動が起き、建築団体も保存を求めている。同大事務局によると7月中旬から解体に着手。旧体育館も2009年夏に解体予定という。

一部の個室などはアーカイブ(記録保存)として復元し、記念写真集作成も準備中とのこと。レーモンド作品はまた一つ、資料でのみ知る存在となった。それも建築の運命とはいえず、つくづく残念という気持ちはぬぐえない。(高野清見)

## 建築 望見

アントニン・レーモンド(1888~1976)は日本人になじみ深い建築家だ。チェコ生まれで米国に渡り、帝国ホテルを設計するフランク・ロイド・ライトに誘われて1919年に来日。第2次大戦前後と晩年を除いて、40年以上も日本に住み、設計した建築は群馬音楽センターなど数百点にのぼる。前川国男、吉村順三ら優れた弟子も育てた。

日本では近年、近代建築の見直しとともに、その紹介者であるレーモンドの再評価が進んだが、欧米ではほとんど忘れられた存在になっている。そこで資料を所蔵するペンシルベニア大学などの日米欧の若手研究者が、回顧展を企画。その日本巡

### レーモンド展 妻の影響に注目 東京女子大寮解体も報告